

昭和五十五年、私たちが市制十周年を迎えたとき、

美しく連なる山なみを望み、しずかに流れる多摩川のもと、雑木林と桑畑の武蔵野台地にひらけた福生市は、多くの人たちのたゆみない努力によって発展をつづけています。

私たち市民は、この地をふるさととして愛し、平和を願い、いきいきとした市民のまちをつくるため、ここに市民憲章を定めます。

と宣言しました。

この市民憲章は、急速に都市化が進むなかで、新しいまちづくりの礎として、また市民の心の支えとして、活力ある市民の町を実現しようと定められたものです。

本市は、二十世紀の最後の年となる平成十二年に市制三十周年を迎えますが、このような節目に福生四千年の歴史を綴った本書『福生歴史物語』を刊行する意義はけっして小さくはないと思います。首都・東京の近郊都市としてさまざまな発展をとげ、この半世紀の間に一人だっただ人口は六万人に急増し、都市基盤も整備されました。しかし、そこから派生するさまざまな課題や問題の解決は容易ではありません。このようなときに先人のたゆみない努力の跡をたどり、伝統的なふるさと文化と風土への認識を深め、愛し、大切にすることを育むことで道を切り開き、新しい世紀に向けて飛躍したものです。

私たち福生市民が自分たちの郷土の歴史と風土に対する認識を深めることは、また、隣人の有する文化と歴史を尊重する心を育てることであり、人間尊重の社会を成り立たせる第一歩だと考えます。

そのためにも、私たち市民一人一人の新しい発想と行動が求められているのではないでしょうか。

本書は、先に刊行した『福生市史』上・下巻の普及と活用をいっそう図るために普及版として作成したものです。市史編纂の成果と学問的水準を十分に活かし、市民の皆様に愛読されるよう編集に努めました。郷土に対する理解と認識がより深まり、これからの福生市の歩むべき道を心に描いていた
できれば幸いです。

平成十一年三月一日

福生市教育長 来住野 和也